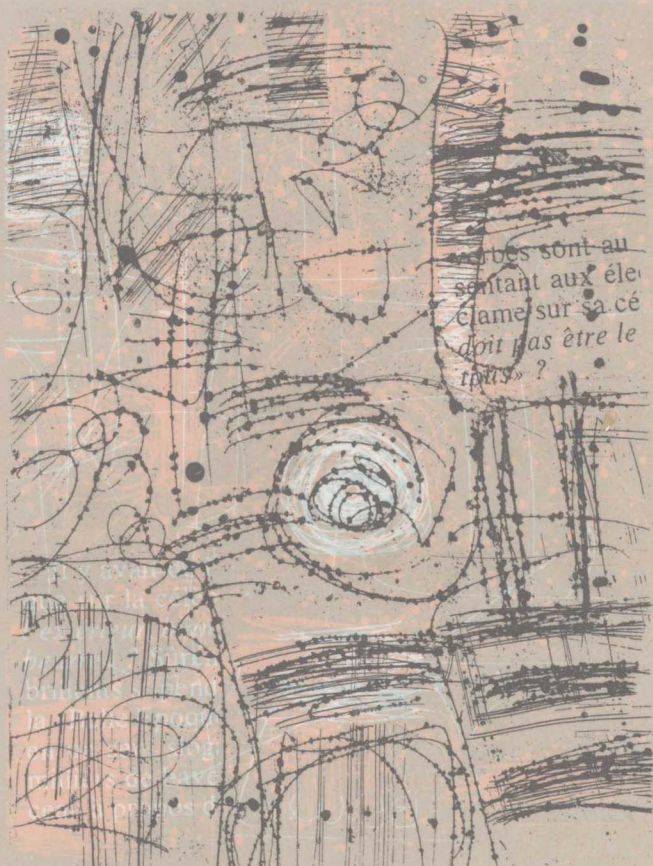


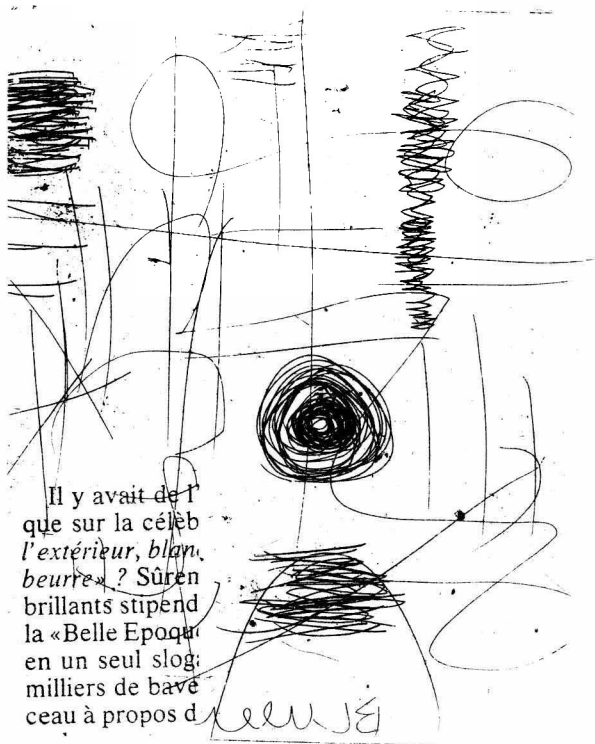
海ユリの時間

木辺弘児



ユリの時間

木辺弘児



Il y avait de l'
que sur la célèb
l'extérieur, blan
beurre» ? Sûren
brillants stipend
la «Belle Epoqu
en un seul slog
milliers de bave
ceau à propos d

木辺弘児（きべ・こうじ）

1931年神戸市生まれ。大阪大学理学部卒。

企業の研究開発職に従事するかたわら1980年頃より小説を書きはじめる。「水果て」で第87回、「月の踏み跡」で第92回芥川賞候補となる。

著書：『沖見』（編集工房ノア）

『水果て』（編集工房ノア）

『遠い蟬』（霧工房）

『少年の火』（編集工房ノア）

『ラスト・パントマイム』（編集工房ノア）

住所：西宮市高木東町16-40-509住田方（〒663）

海ユリの時間

一九九五年六月二〇日発行

著者 木辺弘児

発行者 涸沢純平

発行所 株式会社編集工房ノア

大阪市北区中津三ー一七ー五

電話〇六（三三七三）三六四一

FAX〇六（三三七三）三六四二

振替〇〇九四〇一七ー三〇六四五七

印刷製本 日本電植株式会社

©1995 Kōzi Kibe

0093—9515—7641

不良本はお取り替えいたします

海ユリの時間

装帧 栗津謙太郎

海ユリの時間

私は病院長である。

本年四月ごろより、一人の入院患者と、その担当看護婦が、タブーを犯して山に入り行方不明になった。

それと符合するかのように、従来この地域では予感にとどまっていた二、三の崩壊現象が、にわかに現実のものとなりはじめた。

両者の相関については、すでにさまざまな臆測が行なわれている。

しかし、二人の性格を知悉し、かつ山の過去、現在について、かねてから個人的に研究していた私は、彼ら二人が置かれた状況を、世間一般よりは遙かに明確に推察しうるのである。

関係者の一人として、私は今も、山に入った後の二人の行動が、ほぼ以下の記述に近いものであったと確信している。

1 大クボ

霧が動くと、この地域のまわりをいく重にも取り囲んでいる岩山の、輪郭の一部が見えることもある。が、それも多くは一瞬だけだ。

この院長室の窓から、ふだんくまなく見えているのは、むしろ狭義の世界、——一つの巨大なスリパチ状の窪地と、その斜面に同心円的に刻まれた階段畠、畠のあいだを埋めている人家、などだけである。

人家は、窪地の中腹にはかなり密集しているが、上にいくにつれ次第にまばらになり、周縁山地につらなる遠くの方では、同じ斜面に点在している石灰石の露岩とまぎれて、ほとんど区別ができない。

このスリパチ状窪地のことを、地元民は「大クボ」と呼ぶ。

大クボ内の地面には、今もしばしば深い陥没が起こり、大クボに寄生する形の小さな穴が出来る。このような現象を、人々は「ジバスがほげる」と言う。

語源は不明。おそらく、地鉢（じばち）から転化した方言であろう。

大クボの住民の可動範囲は、大クボ内に限られている。いつから、そうなってしまったのか、は誰も知らない。したがって彼らにとって、大クボの底の直径数メートルの穴が、この世のいちばん低い所である。

穴の中には何も見えない。太陽の光が穴の奥の何かを照らし出した、ということとは、いまだかつてない。

スリバチ形をなした地域の必然として、すべての生活排水、生活廃物は、この穴に落とされるが、それらが穴の奥で何かに当たって砕けたり、しぶきをはね上げたりした、ということも、いまだかつて聞かない。

落とされたものがどこへ行くのか。地の底に堆積するだけなのか、どこか別のところへ流れていくのか。

そのようなことを気にした人、そんな疑問をおもてに出した人も、今までない。

穴から、階段畠をすこし上がったところに、病院がある。それは、大クボの斜面にしがみつくような形で立っている。

穴の近くに病院が建てられているのは、そこからの排出物を、途中のどこをも汚染することなく、ダイレクトに穴に落とせるからである。

「そうか、そうか、……そういうことか」

今日も二階の病棟から、例の男の声が聞こえる。声は廊下を移動している。

「ほら、やっぱり、……ほら、ほら」

声は叫びになったり、つぶやきになったりする。

玄という名のその患者は、異常なのか。

あるいは正常なので、ここに収容されているのか？

そういう詮索も、ここではタブーになっている。いつからタブーになってしまったのか、ということも誰も考えない。

今朝もまた、砂塵で薄黄色にかすんだ青空の、どこからともなくヘリコプターが現われて、大クボの上空を旋回しはじめた。

あのヘリコプターは間もなく、この病院からは、穴をへだてた向かい側に当たる斜面の、円形草原に、大量の物品と印刷物を投下するはずだ。

この地域の住民は、一般に働くことを知らない。

彼らに必要なすべての物品と情報は、こうして一日数回、外部から供給されるからだ。二百年前からずっとそうだったし、これからもそうだろう。

円形草原は直径が百メートル近くもあり、ヘリポートとしても使えるはずだが、いまだかつて一度も、ヘリコプターがこの地に降りたことはない。

ヘリコプターはおそらく、誰か、外部の人間によつて操縦されているはずだが、いまだかつて一人も、外の世界からやつて来て、この大クボの地面に降り立ったものはない。

「そうだ、……結局、つまりは」

玄は今、廊下の壁を見つめている。

今、窓がかすかに震えた。

いつもの通り、投下された資材が円形草原に無事、着地したのだ。

そして仕事を終えたヘリコプターは、早くもこの病院の真上まで移動してきたらしい。回転翼のパタパタというひびきまで、はつきりと聞こえる。ここで帰りの方向へ機首を転換し、それから一直線に、またどこへともなく空の彼方に消えていくはずだ。

つまり、この地域から外部に出ていく情報はない、ということだ。

唯一の例外は、ヘリコプターの操縦士の視野にうつった大クボの風景だろうが、それがどのように外部世界に伝えられているのか、あるいは伝えられてさえないのかは、大クボの住民にはまったくわからない。

外部の世界から、ヘリコプターによつてたえず投下され、たえず供給される、おびただしい印刷物のどこにも、この大クボのことは書かれていないからである。

この地域から外部に出ていく物質もない。

唯一の例外は、大クボの周囲に牆壁のようにそり立つ岩山の、ある一か所から採掘されている石灰石、——という噂が、以前から住民に広まっている。

が、その鉱山が具体的にどこにあり、石は誰によつてどのように掘り出され、どんな手段で外部に運ばれているのかは、大クボの一般住民は知らない。

しかし、かなり多量の重い鉱石を運び出すためのルートが、牆壁のような岩山のどこかを貫いて外部へ通じているらしいことは、人々もうすうす感づいてはいる。

そうでなければ、外部からこれほど大量に運ばれてくる物品と情報の対価を、外部に支払う手段がありえないからである。

玄はまた廊下の中ほどへ引き返し、看護婦詰め所をのぞきこんでいるようだ。

彼は本来は内科の患者であり、実際の処置も内科病棟のスタッフにまかせてあったのだが、入院後、数年が経過した今、彼の無口と非協調的態度、嫌人傾向はますます募り、その病態の底に、ある種の脱出願望が潜在しているのでは？ と疑われはじめた。

したがってその治療法も、内科と神経科にまたがる領域へと移行しつつある。だが残念ながら、この分野での医者たちの経験は、けっして豊かではない。とくに患者との対応の点で。

「そりや無口になりますよ。誰にも、何も、伝わらないと」

今も玄にそう言われて、担当医のGは、すこしあわて気味だ。

「伝わりませんか、やっぱり、看護婦にも」

「ええ」

「まあ、そう言わずに、……じゃ変えてみましょう、あなたの担当を。ちょうどいい人がいるから」

「どんな人？」

「……まあ、ベテランで、とてもかしこい看護婦です。ぼくら医者でも頭が上がらんくらい」
「いやだな、そんな人」

「どうも、とりつく島がないなあ、あなたには。……でも、きつと気が合いますよ、あなたとは。なにしろ変わった人だから」

失言に気づいて、てれ隠しに笑うのはGだけ。玄はうつむいて、にこりもしない。

問題は、我々の世界が大クボ内に限られている、という前提であり、そこからの脱出願望は、この世界内では病氣という形で発現するしかない、というのがGなど医者たちの共通認識である。

もともと、医者たちが脱出願望を危険と見なすのは、それが必然的に「働く価値観」につながっていくからでもある。

二百年前まで、大クボの住民は日夜、働き、働くことを美德、ないしは少なくともプラスイメージで考える、古い文化に支配されていた。

その頃、病人は今の十倍もあつたという。

その後、人々は働かなくなり、病人の数も次第に減った。そして働く価値観がすべての病気を生む、というのが、この二百年間に医学上の定説となった。

今ではその定説が、医者すべての治療活動の基本指針となっている。

玄は今、ベッドから下り、ベッドの四本の脚の長さを順番に調節し直している。

病院の床は、建てられている大クボ斜面に合わせて、いたるところ階段状の段差で分割されているが、それら床の各部分、部分は、つねに異なつた沈下や歪みを受ける結果、たがいちぐはぐに水平面からずれ、傾いている。

玄は「水平」に対してひどく神経質であり、いつもそうして、ベッドを平らにしようと苦心しているのだが、水平度是一向に改善されないようだ。ここ数日は、寝返りを打つたびに目まがいが起こり、天井と床がゆっくりと逆転しはじめる、という。

まわる、まわる、——玄は目を覆い、口を覆つて訴える。

「大げさなこと言わないで」

玄の新しい担当看護婦、夕が言う。

「この病院では、どの部屋も似たようなものよ。ここでは水平というのが、とてもぜいたくなものなんだから。それに、もともと、完全な水平面なんて、この世にあるはずもないし」

「でも、海というものがあるだろう」玄は言う。

「あらあら……、あなたも、そんなものがあると信じてるの？」

「もちろん」

玄はパジャマのポケットから、四つ折りの紙片を取り出し、広げて見せる。それは、何かの

本から不法に切り取ったらしいカラー写真のページで、等高線入りの地図も説明として添えられている。

写真には、塩の結晶が白く光る平らな荒地が、次第に重く濁った半湿地へ、さらには薄紙のような波が等間隔に寄せてくる沼沢地へと、変化していく風景が、写されてある。添えられた地図の等高線群も、右から左へ進むにつれてその間隔が広がり、実線から点線に変わり、やがて左半分の、何も描かれていない白いスペースへと移行していく。

そのスペースには、玄の筆跡でていねいに「海」と書かれてある。

「ここが地上の、いちばん低いところ」

玄は地図上の、地面と水面の境を撫でる。その個所は、すでに何度も指でこすられたらしく、薄黒く汚れ、すりむけた紙の繊維がかすかにけば立っている。

「地面というものは、おそらく孤立していいのだ」

玄は続ける。担当が夕になつてから、彼の口はたしかにすこし、ほぐれてきたようだ。

「それは一見、上がった、下がったり、スリパチ形に閉じられて出口がなかったり、いろいろだけど、結局は一つの方角、一つの矢印に服従して……」

言いながら玄が寝返りを打つと、ベッドが一つの脚のところ、またぐつと軋み、すこし落ち込む。脚の調節ネジの山が摩滅していて、玄の体重を支え切れないからだ。